畜　　産

【酪農】：防暑管理（酪農ヘルパー専門技術員必携より）

適切な牛舎管理をする３つのポイントは、①直射日光に当てない、②熱い空気を溜めない、③できるだけ牛に風を当てます

①日射の抑制・温度が高くなる午後、西日が入る窓にヨシズなどを置いて遮光します

②通風の促進・できるだけ開口部を広く、カーテンを巻き上げ、引き戸は外し開放します・換気用の大型ファンを使って熱い空気を排除します・風が通るように風下に障害物を置かない。

③牛体送風・牛体に風が届きやすい効果的な送風施設を設置して送風する。できれば冷風を送風する。・牛体の前部に風を当てる。

【乳牛の暑熱対策】　・乳牛は暑さに弱く泌乳牛は摂氏 26℃からヒートストレスを受けるようになります。・細霧装置（ミスト）は湿度が低いときは効果的ですが連続噴霧により湿度が高くなる場合は逆効果です、タイマー設置により噴霧と停止ができるようにします。ファンの吹き出し口に細霧（ミスト）を設置して、しっかり蒸発（気化熱）させ、温度が下がるようにします。なお、湿度が高い場合はミストの使用はやめましょう。

【繁殖和牛】発情発見のポイントは４つです。

①発情予定牛の把握、発情や授精の記録に基づいて、その日の発情予定牛を把握しておきましょう。頭数が比較的少ない場合は、繁殖カレンダーが利用しやすいです。PGF は３日後に発情が来ることが多いですが、牛により１日後の場合も、遅いもので６日後の場合もあります。

②発情時の特徴的な変化　個体ごとに、発情時の行動の変化や生殖器の変化の特徴を、記録し十分に理解しておきましょう。発情の真の徴候は、スタンディングです。他の発情徴候は、発情の開始前から現れ始め、発情が終わってからもしばらく続くことが多いです。いくつかの徴候を合わせて記録し判断します。

③頻繁な観察　乳牛の最近の持続時間は６．６時間と短くなっています。１日４回、６時間おきにチェックします。朝５時、午前１１時、夕方５時、午後１１時です。④発情発見補助具の活用　ヒートマウントディテクター、テイルペント、チンボール、歩数計、牛体温計、スタンディング感知器などがあります。

④発情の同期化　PGF は発情後５~１６日の黄体期に投与しないと効果が出ません。黄体ホルモン剤も投与して平均３日後に発情が発現します

【肥育牛】肥育技術の軽重　（俵牛づくりより）

素牛を入れてからの半年間の飼い方が、牛の姿形を決めます。カブリが大きくなるのは生後 20 か月齢です。バラは 20 か月齢以降に大きくなります。枝肉重量があり、ロース芯断面積が大きく、バラの厚い牛を作るためには、牛の能力、サシを入れる能力を十分に引き出す必要あります。粗飼料のワラは乾燥のしかたで、カロテンの含有量が異なります。ビタミン A コントロールを失敗しないためには、ポイントを決めて血液検査をします。寝ながら反芻している快適な環境づくりでは第 1 胃の発酵状態も良いでしょう。ビタミンミネラルきっかけで、飼料の食べ具合が順調になり成績が上がることもあります。

枝葉の技術ではなく、牛が順調に食い込める技術が良い技術です。

【肉牛の暑熱対策】　・乳牛と同様にヒートストレスは摂氏 26℃から受けるようになるといわれており、乳牛と同様にファンによる牛体への十分な送風、細霧装置などによる温度低下、湿度を上げない工夫、牛体を直接冷やすなどの対策に加え、十分な飲水環境の提供、ミネラル成分の補給などが必要です。

【養豚の暑熱対策】　・豚は改良が進み、汗腺が退化しているため体温を下げる機能が著しく弱くなっております。ヒートストレスに敏感で、一般的に舎内温度が 27℃以上から発情の微弱・遅延，受胎率の低下，食欲減退及び増体の減少などの悪影響が発生します。牛と同様に飲水環境、送風、湿度が低い環境での細霧噴霧等でヒートストレスの軽減が必要です。

【鶏の暑熱対策】　・鶏は舎内温度が摂氏 27℃を超えるとヒートストレスを受けます。梅雨明け直後、梅雨の中休み、戻り梅雨明け、フェーン現象等、涼しい日が続いた直後の急激な気温上昇の時期に発生がしやすい環境となります。飲水環境の改善やビタミン、ミネラル供給を多めにしましょう。

【牧草管理】　・梅雨前に刈り取りを行った場合は、2 番再生が順調に生育していると思われますが、まれに長雨等により品種によっては「さび病」等の病害で収量や品質の低下を招くことがありますので牧草の観察をこまめにしていただき、牧草更新時の品種選定に役立てていただきたいものです。　・1 番草刈り取りの時期によって、2 番草の刈り取り時期が前後し、早い場合で 7 月に刈り取りを行う場合マ廊下と思いますが、天候が良くても夕立に見舞われる場合が増えてくる時期ですので、天気予報や地域の雲行きを観察し、できるだけ安全に作業行いましょう。また、刈り取り後の予乾中に降雨により濡れてしまった牧草は、牛に悪影響となりますので集草はあきらめましょう。